

砥部焼
窯元めぐり帖



お気に入りの器を探して、 陶郷をめぐるませんか。

江戸時代から続く焼き物の里・砥部には、100ほどの窯元が点在しています。

窯元はそれぞれに个性的で、伝統を守り深めた作品もあれば、

新しい表現を模索した作品もあります。

清らかな里山をのんびりと回りながら、作業場や窯を見せてもらったり、

窯元さんと話をしたりして、お気に入りの器を見つけませんか。

見れば見るほど、知れば知るほど、砥部焼のとりこになってしまいます。



【窯元紹介の見方】

とべがま ① 砥部窯

掲載している作品
がない場合もござ
いますが、ご了承ください。



【地図】P4-A1

砥部町役場より徒歩5分

← 目印や行き方などを
記載しています

白磁に染付の伝統的な食器を
一つひとつ大切に制作。唐草
文や、地元砥部で目にする野
草や路傍の花を描いている。

☎砥部町 宮内1392 ☎089-962-
2323 ☎9:00~17:00

☎日曜・祝日

☎営業時間内可 ☎有

☎有 ☎砥部 太郎

砥部

← 複数の窯印がある
場合も、代表的な
ものを1つだけ紹介
しています。

☎あいている時間 ☎基本の休み(イベント等で不在の場合もありますので、ご注意ください)

☎工房見学ができるかどうか ☎窯元独自のホームページやフェイスブックの有無

☎敷地内などに専用駐車場がある場合は「有」 ☎窯元の代表者名

砥部焼を識る

【歴史 History】

砥部は古くから焼き物の盛んな地であったが、現在のような砥部焼は、藩政時代に大洲藩が財政の立て直しを図ろうと磁器の開発にとりかかり、安永6年(1777)杉野丈助が白磁の焼成に成功したことに始まる。

明治に入ると、砥部焼はますます発展し、五松斎窯では錦絵磁器を手がけたり型絵染付の大量生産を行ったりした。また、愛山窯では象牙色をした淡黄磁を作るなどして、地場産業の基礎が出来上がっていく。生産量の7割もが世界に輸出されていた時期もあったが、昭和初めの大不況、続く戦争によって、生産は落ち込んでいった。

戦後になると、民芸運動の父・柳宗悦や浜田庄司、富本憲吉たちが来砥、手仕事の技術が残っていることを高く評価し、絵付けやデザインの向上を後押しした。こうしたことが若手陶工らを刺激して、現在のスタイルができていく。

昭和51年、砥部焼は国の伝統的工芸品に指定された。白磁に染付という伝統の技法は今も受け継がれているが、斬新でモダンな作品も増えている。それぞれに個性の光る作品が生み出されているのが、今の砥部焼である。



1



2



1 古砥部とよばれる江戸明治の染付

2 愛山窯の淡黄磁の花瓶

3 五松斎窯の錦手の花瓶

4 コバルトで染めた明治時代の型絵の器



4

【特徴 Feature】

丸みをおびてぼってりしたフォルム。シンプルで飽きのこない文様。磁器でありながら素朴で温もりにあふれており、丈夫であることから、砥部焼は生活雑器として愛されてきた。厚くて丸い縁は「玉縁鉢」といい、ちょっぴり愛嬌のある形をしている。代表的な文様に下記のようなものがある。

玉縁鉢



【文様 Pattern】



唐草文



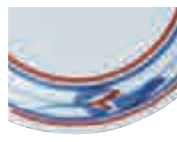
太陽文



なずな文



十草文



赤絵三つ葉文